ガムランとの出会いを通して

アジア文化学科2008年卒業 秦 由季 絵

昨年11月の「音楽によるともいきの可能性」で、一番初めにとてもすてきな演奏をしてくれた子どもたちをご覧になりましたか?彼らが、『なかよしはうす』の子どもたちです。

私は筑紫女学園大学でガムランに出会い、3年生のとき授業の一環として参加した『なかよしはうす』との交流会で、こども達の豊かな感性と自由な発想に感銘を受けました。このとき、ただ単に子ども達が楽しい時間を過ごすことができた、というだけでなく、私たち自身もガムランの響きが持っている「包み込む力」を実感したのです。この経験がとても印象的だったため、卒業研究では「ガムランの可能性」というテーマで共同研究を行いました。私は子どもたちの行動面に注目して研究し、ガムランの響きに包まれていることで、日常とは異なる行動が見られるということに気づき、ガムランの響きがもつパワーを実感したのです。それ以降も『なかよしはうす』とのガムラン交流会は何度か回を重ね、今年度からは月一回、定期的に活動しています。活動を続ける中で子ども達の様子が変わっていくことに気がついたり、自分たちの子どもたちへの関わり方を考えたりと、この活動をより深めたいと考えるようになり、『Sahaja さはじゃ』という障がいをもつ子ども達と一緒にガムランを演奏するグループを立ち上げました。

現在、私は福岡教育大学特別支援教育特別専攻科で特別支援教育を学んでいます。「特別支援教育」とは障がいのある子ども、そうでない子どもに対して、個々のニーズに応じて行う教育のことです。従来の障がい児教育と異なる面は、対象が「全ての子どもたち」となったことが挙げられます。障がいの種類や程度にかかわらず「困っている」とか「苦手がある」ということがあれば、支援を行っていくことが必要とされているのです。

一年間という短い期間で、学校現場で特別支援教育を行うために必要な考え方や知識、技術等の基礎を習得しなければならないため、学内でも「専攻科は忙しい」と有名なのだそうです。実際に、レポートや支援、修了研究等、忙しいながらも充実した毎日を送っています。支援というのは、障害をもった方が大学に来られてそれぞれにあわせた活動をさせていただく実習です。私はLD(学習障害)で「読み」に困難を抱える中学生の子どもさんの支援を行うグループで、週1回、読みの指導やパソコンを使った余暇を充実させる活動などを行っています。支援を行うのは週1回ですが、長期的な目標を基に各回の計画をたて、必要な備品を用意し、終了後はその日の反省をもとに次回の方針を決め…と、一週間はすぐに過ぎてしまいます。支援を通して感じるのは、勝負は一回きりということです。子どもたちは、一度「いやだなぁ」「苦手だなぁ」と思ってしまうと、その後も苦手な気持ちが続くために、持っている能力を発揮できなくなる可能性があります。そのため、その都度「できた!」と自信を持てるように、活動の内容や支援者の声かけ、接し方にまで気を配ることが必要なの

です。このことは、支援だけでなくどんな子どもさんを相手にした場合でも共通することだと思います。支援を通して、子どもという存在に接することの責任の重さと、活動を通して子どもたちが「できた」と自信を持ってくれることの喜び、その両方を実感し、これからも特別支援教育に関わっていきたいという気持ちが強くなりました。

私が障がいのある子どもたちと関わっていくことを希望し、現在の進路を決めたのはガムランを通して『なかよしはうす』の子どもたちやお母さん方と出会ったことが大きく影響しています。子どもたちは、最初こそ「きらい!あっちいって!」「バカ」などと言い、私は落ち込んだ事もありましたが、『なかよしはうす』にボランティアとして伺ったり、一緒に遊んだりするうちに、いつのまにか会うと「だいすきー!」と寄ってきてくれるようになりました。彼らは多くの言葉で語ることをしません。しかし、多くのことを感じ、それを様々な方法で表しているのだな、と子どもたちと数年間続けて活動した中で、実感しています。

ガムランとの出会いをきっかけに、田村先生、共同研究の仲間、Sahaja のメンバー、『なかよしはうす』のみなさん、ワークショップに参加されている方など、大学の内外を問わず様々な人と出会い、様々な経験をすることができたのだと思います。このようなご縁に巡りあえたことに感謝の気持ちでいっぱいです。これを自分の糧として、これからも特別支援教育に携わっていきたいと思います。どんな子も、みんなが自分らしくいきいきと生きていけるように、その手助けをしていきたいです。





▲ 月一回のペースで行っている【 "なかよしはうす" の子どもたちとのガムラン交流会